

Watch!

統計から社会の実情を読み取る

第30回 和菓子都市と洋菓子都市

本川 裕 | Honkawa Yutaka

アルファ社会科学株主席研究員

■東京大学農学部農業経済学科卒。財団法人農業経済研究協会常務理事研究部長を経て、現職。立教大学兼任講師。農業、地域、産業、開発援助などの調査研究に従事。現在は、ネット上で「社会実情データ図録」サイト(<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/>)を主宰するかたわら地域・企業調査等を行う。著作は「物流コストと日本の産業競争力」(学術誌『国民経済』、2004年)、「統計データはおもしろい!」(技術評論社、2010年)、「統計データはためになる!」(技術評論社、2012年)等。



日本人の好きなお菓子は?

まず、NHKの調査から、日本人の好きなお菓子・デザート(スイーツ)について、ランキングをかけた(図1)。

ベスト5は、アイスクリーム、チョコレート、プリン、チーズケーキ、ショートケーキである。性別、年齢にかかわらず好まれているアイスクリーム、チョコレートが上位2位を占めている。

男女年齢別のランキングを見ると、まず、10位までの全体的な回答率水準の高低において、高年層より若年層で、また、男性より女性で回答率水準が高く、若い女性の「お菓子・デザート好き」が目立っている。男女年齢ごとに第1位の品目が総て異なっている点も目を引く(表1)。

好きなお菓子・デザートの種類としては、若年層では洋風のお菓子・デザートがほとんどで、10

位までに和風のお菓子・デザートが登場していないのに対して、男性高年層の1位は大福、女性高年層の1位はおはぎとなっているなど、高年層では和風のお菓子・デザートが中心を占めている。

人気菓子の変化

NHK調査について、新旧ベストテン比較を表に掲げた(p.40表2)。

かつては生クリームをふんだんに使ったショートケーキやシュークリームに人気が集中していたが、今では、それほどの人気ではない。カステラもかつてほどの人気はない。チョコレート人気はかなり上昇しており、消費動向と一致している。和風菓子系統は、桜もち・かしわ餅は人気が低下したが、大福は上昇、おはぎは横ばいと、品目によって人気動向は異なっている。

このように、洋菓子系統が伸びて、和菓子系統が凋落しているというよりは、それぞれの系統の中で品目ごとに盛衰があることが分かる。

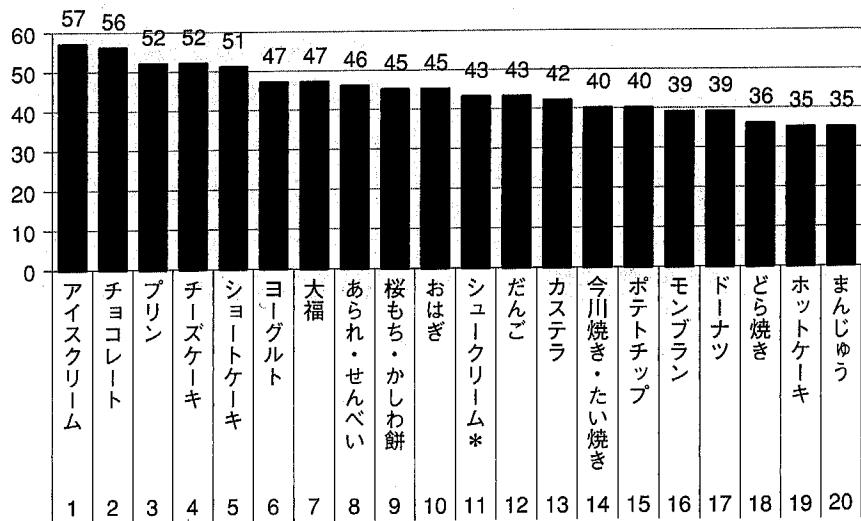
私的な経験をいえば、図1の男の高年層の第10位に顔を出している「ところてん」を小学生の

表1 好きなお菓子・デザート第1位

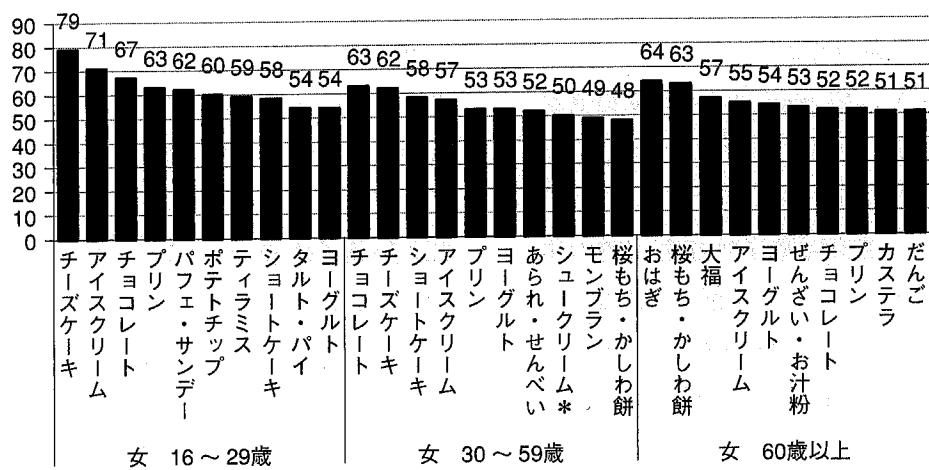
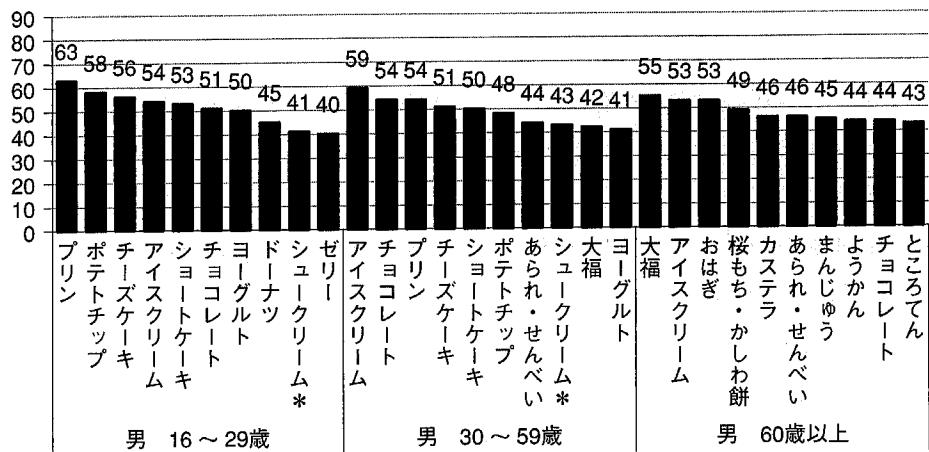
	16~29歳	30~59歳	60歳以上
男	プリン	アイスクリーム	大福
女	チーズケーキ	チョコレート	おはぎ

図1 日本人の好きなお菓子・デザート・ランキング（2007年）

(複数回答結果 単位：%)



(男女年齢別ベスト10)



*エクレア・シュークリーム

資料) NHK放送文化研究所世論調査部「日本人の好きなもの」2008年

表2 好きなお菓子のベストテンの変化

	1983年	2007年
第1位	ショートケーキ	チョコレート
第2位	シュークリーム・エクレア	プリン
第3位	プリン	チーズケーキ
第4位	桜もち・かしわ餅	ショートケーキ
第5位	カステラ	大福
第6位	チョコレート	あられ・せんべい
第7位	あられ・せんべい	桜もち・かしわ餅
第8位	おはぎ	おはぎ
第9位	大福	シュークリーム・エクレア
第10位	ポテトチップス	だんご
備考	チーズケーキ 12位 だんご 15位	カステラ 11位 ポテトチップス 13位

注) 2007年の順位からは、1983年には含まれていなかったアイスクリームとヨーグルトを除いている。1983年の順位は、対象を16歳以上に補正した値をもとにした。

調査方法が1983年調査は郵送法、2007年は配布回収法と異なり、回答率にも差があるので、回答率ではなく、順位で比較した。

資料) NHK放送文化研究所世論調査部「日本人の好きなもの」1984年、2008年

頃黙菓子屋で食べて本当に美味しいなあと感じたことを思い出すが、今の人人がそんな経験をする環境にはないことは確かである。これだけ甘いものが普及すると、古い洋風菓子の「カステラ」などに対する昔の感動を、今の人人が味わう環境にはないといわざるをえない。野菜の人気などと比べると、お菓子・デザートへの人気は、時代の変化や世代の交替を色濃く反映する食のジャンルといえる。

和菓子都市と洋菓子都市

和菓子が好きな人が多い都市と洋菓子が好きな人が多い都市は、日本の中でどこだろうか（以下、生菓子に限る。以下同様）。

家計調査により、都道府県庁所在都市別の年間購入額を、和菓子（X軸）と洋菓子（Y軸）についてプロットした散布図を描いてみた（図2）。毎年の変動に左右されないよう、データは2008～12年の5か年平均とした。

まず、和菓子と洋菓子のレンジ（値のばらつき）を見ると、和菓子は5千円～2万円の範囲にある

が、洋菓子は、1万4千円～2万4千円とレンジが小さい。すなわち、和菓子の方が地域により好き嫌いの幅が大きいことが分かる。

次に、全体的には、都市の分布は右上がりの傾向をもっていることが分かる。すなわち、洋菓子が好きな都市は和菓子も好き、つまり、どんな菓子でも好きな都市がある一方で、そもそも菓子は好きでない都市がある。和菓子と洋菓子とが代替的な財であれば、右下がりとなるはずであるが、そうはない。

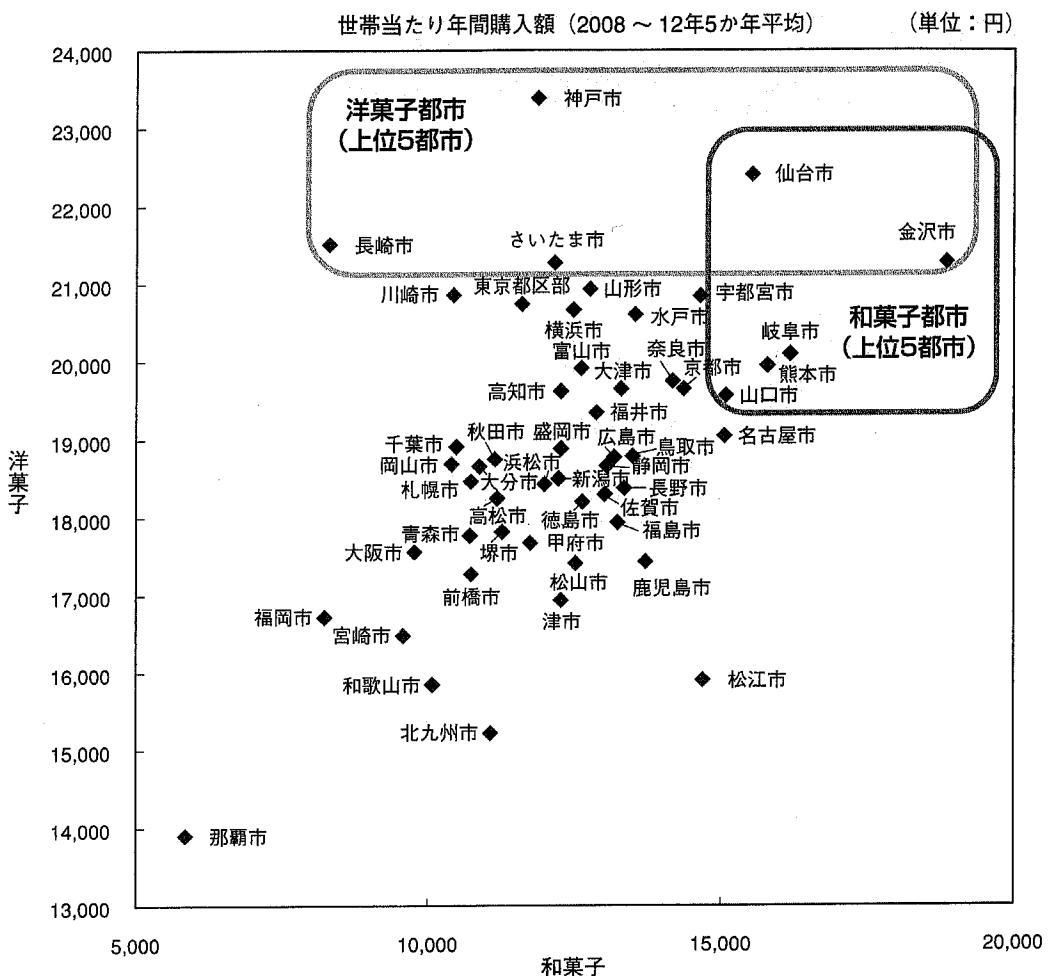
年間購入額の全国平均は、和菓子は11,675円、洋菓子は18,110円と洋菓子の方が多い（都市別に見ると、実は洋菓子の購入額の方が少ない都市はない）。金沢市は、和菓子1位、洋菓子4位と和洋を問わず、お菓子がそもそも好きな都市であることが分かる。仙台市も金沢市と似たところがあるが、金沢市より洋菓子にウェイトが高いという違いがある。他方、那覇市は和菓子も洋菓子も全国で最も購入額が少なく、和菓子、洋菓子を問わず、お菓子が好きでないことが分かる。

和菓子の購入額が多い上位5都市を和菓子都市と名づけ、洋菓子についても同様の都市を洋菓子都市と名づけるとすると、それぞれの構成都市は、図上で矩形で囲んだものとなる。表3には10位までの都市名を掲げた。

和菓子都市は、金沢がトップであり、岐阜、熊本がこれに次ぐ。名古屋が6位と和菓子都市としての側面が強いことは少し予想外であった。洋菓子に比して和菓子が相対的に多いという点では松江も和菓子都市といえる。やや順位は低いが茶道のメッカ京都も和菓子都市である。城下町など起源が古い都市において和菓子消費が多いという一般傾向が見て取れる。

洋菓子都市には、明治以降、港湾都市として西洋の食文化の受け入れ口だった神戸がトップであり、また、江戸時代唯一の海外への窓口であり、

図2 和菓子都市と洋菓子都市



注) 都道府県庁所在市及びその他政令市（川崎市・浜松市・堺市・北九州市）の計51市の二人以上の世帯が対象。
和菓子（和生菓子）は「ようかん」「まんじゅう」「他の和菓子」の計、洋菓子（洋生菓子）は「カステラ」「ケーキ」「ゼリー」「プリン」「他の洋菓子」の計。

資料) 家計調査

カステラの発祥地としても知られる長崎が入っている。新興住宅地を多く抱える仙台、さいたまなども洋菓子の消費額が大きい。

東京区部、大阪市といった大都市圏中心部や福岡市、札幌市など地方中枢都市には、デパートや高級菓子店が多く、洋菓子、和菓子の消費量が多いようにも想像されたが、必ずしもそうではない。菓子文化は地方都市にこそ育っているといえそうである。

* 「社会実情データ図録」関連図録
[1] 図録 0335 「日本人の好きなお菓子・デザート・ランキング」

表3 生菓子の消費が多い都市（2008～12年平均）

	和菓子	洋菓子
第1位	金沢市	神戸市
第2位	岐阜市	仙台市
第3位	熊本市	長崎市
第4位	仙台市	金沢市
第5位	山口市	さいたま市
第6位	名古屋市	山形市
第7位	松江市	川崎市
第8位	宇都宮市	宇都宮市
第9位	京都市	東京都区部
第10位	奈良市	横浜市

注・資料) 図3と同じ